

デンマークからエアベアリングとコントラックギングを融合したプレーヤーが初上陸
明瞭で闊達。ピタリと音像が定位する爽快感

Audiophile

傅信幸



デンマークのバーグマン・オーディオ (Bergmann) というメーカーのトーンアームとトーンテーブルが日本に初上陸した。製品名の Magne (マグネ) は北欧の神話に登場する力持ちの子供の名だそうである。同社に三機種ある製品では本機がいちばん下の弟になる。シンプルで精密感溢れるが決してメカメカしくはないモダンな外観。このフォルムだけで惚れてしまう人がいらっしゃるだろう。音楽とオーディオ好きな父親の影響を受けて育ったという同社の創業者は、90年代から試作をかね、2008年に同社を設立した。

では Magne を見てゆく。

トーンテーブルとトーンアームとにはエアベアリングが採用されている。トーンテーブルのプラットターを外すと、ボディ（ベース）上面にインナープラッターとおなじ大きさで、明らかに表面精度が高くなっているエリアがある。ここに空気を送つて薄膜のエアベアリングの空気層を形成するためだ。プラッターの軸の先端下部を見ると何と平らなままだ。空気で浮上するから負荷がかからないので先端に軸受けが存在しないのだ。空気を送るポンプを動作させないとプラッターは摩擦で回転しない。

リニアトラッキングのトーンアームでアームの動作の元となる、スライディングするパイプのシャ

バーグマン Magne ¥1,500,000

トーンアーム部 ●型式:スタティックバランス型リニアトラッキング方式 ●適合カートリッジ重量:8~15g
トーンテーブル部 ●駆動方式:ベルトドライブ ●回転数:33·1 / 3, 45rpm ●プラッター自重:5.5kg ●寸法
／重量:本体・W495×H165×D440mm / 18.5kg、エアサプライ部・W150×H160×D330mm / 8kg
●問合せ先:アクシス(株) ☎03(5410)0071



写真左側、ベース天板からアームの付け根へ接続されているチューブは、アームの横スライド時の摩擦を軽減しスムーズなトラッキング動作を助けるためのエア供給路。アーム後端から延びるリード線にはアームの上下左右への動きを妨げないよう極めて細い高品質銅リップ線が用いられ、RCA端子による出力部(XLRやDIN端子も選択可能)へと接続されている。端子部右側にはアームとターンテーブルへ圧搾空気を送り込むパイプの接続口とDC12Vの駆動用電源の入力端子が並ぶ。



写真中央、ターンテーブル用スピンドル受けの横に見える小さな孔が、ブラッターをフローティングさせるための圧搾空気の噴出孔。ブラッターとベースの隙間に空気層によるエアペーリングを形成し、二重構造を持つ総重量7kgのブラッターをベースから浮かせることで、摩擦抵抗を極限まで低減させる。左上にDCサーボモーターのドライブブリーダーが見える。



フトに目をこらすと、上部に小さな穴が18個並んでいる。ここから空気が放射されてアームの支点にエアベアリングを形成する。かつてわたしもリニアトラッキングアームをいろいろと使ってみた。一般的なオフセットアームが、ディスクの音溝に再生針が自然に連れて行つてもらうのに対しても、リニアトラッキングは支点を移動させるのがなかなか難しい。バーグマンの場合は支点をエアベアリングによりスベスベな動きにして、音溝に連れて行ってもらおう、というシンプルな方法を、支点の精密加工によって得た。

輸入元へ出かけて試聴した。フォノカートリッジはマイソニックのウルトラエミネントBC、エアーレンジのアンプ群を使い、スピーカーはウイルソンオーディオのサブリナ。アーム自体の調整はもちろん、Magneを水平にセッティングすることに努めた。

なんだこれは? 明瞭で闊達な音。シンプル&モダンな外観とともに、本機の聴かせてくれる音に、レトロ感はない。帯域がナローであるとか繊細さを丸め込んだブレンンド感ではなくとてもワイドレンジだ。低音はリズム感よく伸びており、高音はヌケがよく澄んでいる。キレがよくてしかも精緻な音である。S/N感が高く、サーフェスノイズが低く聴こえる。これはLPを聴いているのか? と不思議になるくらいだ。ただし重厚な音こそアナログだと考えている人には向かない。

本機をはじめリニアトラッキングアームが聴かせてくれるのは、フットワークが軽快な表現であるようだ。そして音像の安定感。リニアトラッキングの先入観から発言するのではなく、ピタリと音像が定位するのが爽快だ。アナログディスクのコレクションをMagneで聴き直してみたいと思つた。